調査報告

安心院地方の地頭館・山城について

柳瀬正美

目次

はじめに
第一節　宇佐郡地頭三十六人衆と館
一　地頭について
二　中世郷土史概観
第二節　安心院町内の古城跡
一　竜王城
二　佐田城
三　飯田城
四　潰山城
五　森山城
六　鳥越城
七　筌口城
八　赤井城
第三節　地頭と屋敷・館
一　田口城
二　津房村城
三　丸山城
四　安心院氏館
五　新開氏館
六　大村城
七　松木氏館
むすび

はじめに

城といえば、たいていは姫路城や大阪城・名古屋城にみられる天守閣、上野城・熊本城に代表される高い石垣のある近世の城であって、中世の小規模な城に興味を持つ人は非常に少ない。しかし幼い頃、土塁や空堀のめぐる近くの城山で遊んだ経験や思い出を持つ人は少なくはないであろう。そこには勝利の栄光や敗戦の悲涙があったであろう。ある人はみにくい権力争いの構築物でしかないという。しかし、それを作るため私達の祖先が血と涙の苦しみを味わったことも想像できよう。ここでは安心院地方の先人達の足跡をさぐり、そこから当地方の伝統の生まれた点について考えてみよう。これらの古城は文化財たる視点だけではなく、安心院庶民史にもつながる貴重な遺産であるからである。

ところで、ここでは題からもわかるように山城が中心になっているので、以下それについて述べることにする。ただ、最近ぶどう園造成のため城跡が破壊され、ほとんどその形が残っていないのは残念である。

①青山城
②赤井城
③飯田城
④新開氏館
⑤安心院氏館
⑥龍王城
⑦潰山城
⑧鳥越城
⑨大村城
⑩森山城
⑪松木氏館
⑫筌ノ口城
⑬津房村城

第一節　宇佐郡地頭三十六人衆と館

一　地頭について

宇佐郡には三十六士の地頭がいたので、彼等を宇佐郡地頭三十六士と呼ぶ。また彼等（三十六士）を宇佐郡公方衆三十六人とか、或は小給人三十六士ともいっている。そして彼等は相当の荘園を領有し、城郭を構え、多くの家子郎党を従えていた。ところで、地頭とはどういう人々をいうのか、あるいはどういう任務にあたるのかということについて若干ふれておこう。

地頭は国衙領の基本単位である郡・郷・保や荘園ごとにおかれるのがふつうであって、それぞれの地域ごとに年貢の徴収と納入、土地の管理・警察権の行使による治安の維持などにあたるのが任務であった。地頭の給与に関して一定のきまりはなかったが、承久の乱後の新補率法はよるべき先例のない場合の標準として定められたものであるから、これによってほぼ大体の見当をつけることができる。この新補率法の主要な内容は次のようなことである。

（イ）田畠11町ごとに1町ずつは、年貢を荘園領主・国司に納めずに地頭の所有とする地頭給田

（ロ）その地域内の田地一反ごとに五升ずつを地頭の所得とする加徴米

（ハ）山野や河・海からの収益物は地頭と荘園領主・国司らとで折半する

イはいわば地頭のおかれた地域の11分1の面積をその所有地とすることであり、ロは地頭が年貢の徴収と納入を行う、その一種の代償として与えられた給与であるといえよう（「加徴米」とは年貢に加えて徴する米という意味である）。

地頭の起源については、本来土地のほとり、即ち現地をさす言葉から転じて、平安中期以来の寄進地系荘園の荘官の名称になったものとされている。

平氏政権の下では畿内・西国の武士が主として平氏の家人に組織されたが、その一部は国衙領・荘園の地頭に補任された。鎌倉時代に編纂された『吾妻鏡』には「幕府以前に地頭といわれたのは、多くは平家の家人で、朝廷から任命されたものではない。あるいは平氏の領内に地頭と称して補任し、あるいは国司・領家が私の恩としてその荘園に任命したもので、荘園領主の命令にそむいた時には改任された」と述べているが、平氏の地頭の実例は安芸国においてしか知られておらず、詳細は不明である。しかし、平氏はその家人を地頭に任命して、彼等の在地支配権を強化しようとしたことは、幕府の地頭設置の先がけとしての役割をはたした。けれども平氏の地頭の設置範囲は限定されており、朝廷の許可をうけたものでなく、荘園領主が任免権をもっていた点は幕府の地頭とは異なるものである。

次に幕府の地頭についてであるが、その初期については不明の点が多い。一一八五（文治元）年諸国に守護地頭を設置と年表に書かれているが、全国のいたるところの国衙領と荘園に地頭が設置されたわけではなく、当初は平氏やその関係者の旧領・謀叛人の所領に限られていたというのが正しい。この場合には従来の地頭・下司らが解任されて、新たに幕府側の御家人、それも多くは東国出身者が地頭として送りこまれ、幕府権力の全国的拡大に大きな役割をはたした。畿内・近国地方ではこうしたケースが多かったが、東国においては平氏や謀叛人の旧領以外にも、それまで下司だった在地領主が御家人となり、将軍から地頭に任命されて在地領主権を強大に保障されるという場合が一般的であった。このような東国地頭の任命は、幕府の東国に対する支配権のあらわれである。

二　中世郷土史概観

1　地頭の発展期

前項で地頭の一般的なことについて述べたので、ここでは宇佐郡の地頭について述べることにしよう。宇佐郡の地頭については、尾立維孝氏の『宇佐郡地頭伝記』に詳しく述べられているので、それを参考にして以下述べることにする。

地頭ということばは平安末の平氏の時代に出現してきたということは前で述べたが、この宇佐郡においてその語が文書上に現われるようになったのは鎌倉にはいってからである。『宇都宮文書』に佐田氏が正応三年に地頭職に補任されたことが載っていることから、ほかの地頭たちもほぼその頃補任されたと思われる。そして、このように補任された地頭は家の子郎党を従え戦闘に従事した。そのようにして発展していったのが宇佐郡地頭三十六士である。最初の頃（北条氏の時代）はその数も少なかったが、足利時代の中葉に至っては其数も六十幾人に上り、十一郷二百三十一村に割拠し、勢力をふるっていた。しかし最初の頃は幕府（鎌倉）の力が強かったため活動は活発ではなかった。それが戦国の世になると活発になりはじめた。延元元年（一三三六）足利尊氏が九州の野に下り、持明院の詔書を振り回し、大号令を下した。すると昨日まで境を争った地頭が我先きと、其麾下に属し上国に上り、足利氏の為に戦功を樹てた。これが宇佐郡三十六士の先祖、すなわち宇佐郡地頭が公的に活動した嚆矢である。

ところが、興国元年（一三四〇）征西将軍懐良親王が九州に下ると、今度は地頭達は親王に従って活躍した。つまり、東に付くかと思えば今度は西というふうにしていったわけである。このようなことを何度となく繰返し発展していったのが本郡の地頭である。しかし、本郡の地頭がすべてそういう過程をたどったかといえばそうではない。東に付いたり西に付いたりするので、地頭間でも争いはたえなかった。弱い者は衰え、強い者は生き残るというふうにして発展あるいは滅亡していくのがこの時代である。それ故自分の地位を守るため大内氏に降伏したり大友氏に服従したりせねばならなかった。この時点において地頭は衰退しはじめた。

2　地頭の衰退期

地頭が発展していったのは戦国時代の初期の段階で、後期から織豊政権の時代になると彼等は衰退の一途をたどるようになってきた。豊臣秀吉が中央に現われて以来、弱小孤立が不可能になり、小は大に併合されるという気運が動いてきた。三十六士をはじめ地頭共も滅亡の運命に逢着したので、全く群小割拠は許されぬことになった。そして永禄天正期になると本郡三十

六士は大友氏に服従し、大友氏の支配下となった。しかし、全部が全部大友氏に従ったのではなく、反対する者もいた。時枝氏・佐野氏などがその代表である。時枝氏は天正十三（一五八五）年十月に大友に叛し、この日中島氏によって滅ぼされ〔広崎文書〕、佐野氏は天正十四（一五八六）年に滅ぼされた〔宇佐郡記〕。このようにして反大友派の地頭は滅ぼされていったのである。その後黒田氏が豊前に移封されると同時に残余の地頭も滅ぼされてしまった。しかし、中には庄屋として残り、現在に至っている者も少なくない。以上が宇佐郡の地頭の成立から衰退までの概略である。

第二節　安心院町内の古城跡

安心院地方には地頭が築いたと思われる城跡が現在調査した結果十数城ある。しかし草に埋れてしまってどこに城跡があるのか、わからないのが数多くある。自分の家の近くにあっても知らないと答える人もあり、なかなかその所在をつかむことがむずかしい。しかし、その所在をつかんだ時には感激し、来てよかったと思ったこともしばしばあった。そして城跡に立つと戦国時代の頃の様子が頭に浮んできて、その頃の時代にいるような気持ちになることもあった。

ところで、安心院町内の城についてであるが、これに関しては『豊前古城記』がもっとも詳しいが、そのほか『豊前志』や『太宰管内志』にも記されている。また『大宇佐郡史論』『安心院町誌』『佐田郷土史上巻』にも記されている。

一　龍王城

1　名称

龍王城と称す。又神楽丘城・神楽嶽城・臥牛城とも称す。龍王城と称すのは山上に龍王権現（今の海神社）があったからであり、神楽城とは大宮司宇佐公泰が八幡宮を参拝したとき「一国の守護になし給へ、神意に随ひ一城を創建したい」と祈った

所が、安心院の山上と思われる所に経津主神が現われて神楽を舞われた夢を見たので、すなわちそこに城を築いたとの故事に基くものである。臥牛城とは山形が牛の臥したのに似ていることからそういうのである。

2　位　置

宇佐郡安心院町大字龍王にあり、即ち駅館川の上流・深見川の左岸にあつて、安心院盆地の南境に聳える龍王山（標高三百十五米）の山頂にある。

3　所在地

本城跡

所在地＝安心院町大字龍王字臥牛八百六番、八百八番、八百九番、八百十番の一と二＝原野二十一町

大手門跡

所在地＝安心院町大字龍王四百八番＝宅地七十七坪

同町大字同字同四百四十八番＝宅地十八坪

古城屋敷

所在地＝安心院町大字龍王字古城七百八十番の一＝畑一反七畝十四歩

妙庵寺

所在地＝安心院町大字龍王字正定院三百十一番＝宅地百七十五坪

同町大字同字同三百十二番＝宅地二反歩

4　現　状

龍王城跡は標高三百十五米の龍王山にあり、頂上より眺めれば北方前面に安心院五千石の盆地を俯瞰し、南方後面に院内川深見川、津房川の渓谷を望むことができる。更に遠く展望すれば東方には大牟礼、鹿鳴越の諸峰があり、南方には鶴見・由

布、立石山があり、西方には花牟礼、鹿鳴の諸嶽があり、北方には妙見、大蔵、御許、米神の諸山がある。

また、龍王山は松杉樫竹等を以って充たされ、南方即ち後方には多くの岩があり仙の岩と呼ばれており、頂上には東西約二十間南北約十三間の不規則な楕円形をなした平坦地が約一反歩ある。また其地に現在礎石がわずかに残っている。これは廃城〔松平重直、寛永十六年高田に移城『豊城世譜・杵築史考』〕注1後に鎮座した龍王権現の残礎であり、その鳥居の礎石も在り、山嶺の東端には矢倉の跡があり、現在センガンヤグラと呼ばれている。西端には牛首の険があり、並びに塹濠の跡もある。また南腹石壁の間には古刹仙岩寺があり、東腹林中には海神社（龍王権現）があり、更に北方山麓には古城屋敷・大手門跡・妙庵寺等もあり、この一帯には矢倉畑・城道・長屋・上町・新村・谷町等の地名も残っている。

また慶長頃の古図（妙庵寺蔵）にも龍王城について詳細に記している。それによれば、頂上には本城があり約一反歩、少し下って東側に遠坂越後殿丸と蟹氏丸、仙翫楼、西側に一野彦兵衛丸があり、西水手、東水手、馬場の位置も明示してある。山麓には家臣の住居や大手門、搦手門があり、その門城内には上町・下町・横町・寺町があり、域外には西新町・新町・鍛冶屋町・職人町などの名が見える。又妙庵寺禅堂、妙庵寺公塔も描かれている。

5　大手門跡・古城屋敷・妙庵寺、その他大手門跡

龍王山の北麓にあり、残存の石垣は左右各約十間（一八・二米）、高さ約三間（五・四六米）、門跡の幅約四間（七・二八米）である。向って右の石垣は昔のままであるが、向って左の石垣は後世手入れしたもののようである。門跡の内は現在宅地となっている。

古城屋敷

大手門跡の西方約一町に在って龍王山に直面している。桝形の門址がありその巾二間（三・六四米）、高さ二間（三・六四米）向って左に続く石垣は約十五間（二七・三米）、右に続く石垣は約十間（一八・二米）、屋敷跡は現在畑となって東西約二十七間（四九・一四米）、南北二十間（三六・四米）。慶長の古図にはこの辺は鍛冶屋町等とあるから、その後の築設と考

えられる。一説ではこの屋敷は松平重直の館跡といわれ、もう一説では島原藩関係の龍王陣屋跡ともいわれている。それ故この屋敷を別名代官屋敷とも呼んでいる。しかしはっきりしたことはわからない。

妙庵寺

龍王山の東北麓にあり、曹洞派の禅寺である。後小松天皇の応永十七年（一四一〇）に泉福寺二代明巌が開いた。はじめ万福寺と称していたが後に嵩山小林寺と改め、大仏から当所上町寺屋敷に移り慶長年間細川忠興公の舎弟幸隆公一万石を領し龍王城に入るとその菩提寺となった。慶長十二年（一六〇七）幸隆公龍王城に没し現在地に葬ったので、寛文四年（一六六四）公の妙菴の号をとり龍王山妙菴寺と改めた。なお現在その地に霊殿があり、その中に幸隆の墓碑がある。それには次のように刻まれている。その他この寺には細川幸隆の位牌、明巌禅師の木像等がある。[注2]

（正面）真慈院殿一温妙庵大居士

（右側面）慶長十二年（左側面）十一月一日

城下町

小字名を「町」と称する所で、目の字形に町造りされ、道の両側溝は三方石畳みで、その上に石蓋を置き、その水は集まって大手門脇から用水池に注ぐように、小規模ながら手際よく造られている。大手門内にある町であるから城下町と呼ぶよりも、むしろ城内町と呼ぶほうが適切であると思う。一方、近年（戦前）までここで龍王の市と呼ばれる市がありにぎわっていた。

城主館跡と奥方館跡

町から城道を上って左右の段々畑を数段過ぎた左側の畑が通称「御方屋敷」で、右側少し高目の最も面積の広い畑が通称「櫓畑」で、平時の城主館や奥方館と推測され、その下の段々畑は上級武家屋敷、町は一般武士や地主・商人等の住居地であっただろうと推定されている。

注1　松平重直　小笠原秀政の四男で、慶長六年（一六〇一）信濃松本城で生まれ、将軍秀忠の命で松平重忠の養子となり、寛永三年（一六二六）養父の遺領の内三万石を継いで摂津三田の城主となった。寛永九年（一六三二）十二月十一日三万七千石の龍王城主として入部した。寛永十四年（一六三七）島原の乱が起り幕命により重直もこの乱に参加し勲功をたてた。寛永十六年（一六三九）龍王城から領内高田城に移り、同十九年（一六四二）参勤中に江戸の第で病死、享年四二歳であった。

注2　細川与八郎幸隆

細川幽斎の三男で、若くして僧籍に入り、京都愛宕山福寿院の住職であったが、兄忠興公の苦戦中であるを察し還俗して兄を助け、慶長五年（一六〇〇）二豊三十二万石に封ぜられ、兄忠興公が中津城に入ると、弟の戦功に報いて龍王城主とし、一万石を与えたのである。幸隆の龍王入城は慶長八年（一六〇三）二月二十九日で、四年半後の慶長十二年（一六〇七）十一月朔日病死した。享年三十六歳であった。

6　由来史料

龍王城に関しては、『太宰管内志』『歴代鎮西要略』『史蹟名勝天然紀念物調査報告書第十一輯、龍王城址』等で詳しく述べられている。また、『宇佐郡地頭伝記』『軍記略』『豊府紀聞』等にも記されている。

『宇佐郡地頭伝記』によれば「後伏見天皇の正安中、宇佐大宮司公泰八幡宮に詣で一国守護の城を神威に随ひ草創すべしと祈りけるに安心院の山上と覚しき所に経津主現れ給ひ神楽を奏し賜ふと見て、夢は覚えぬ、即ち其山上龍王に城を築きて神楽嶽城と称し、安心院の庄十六ケ村の地頭となる」とある。つまりこれを要約すると正安中（一二九九～一三〇一）に宇佐公泰が龍王山に城を築き、安心院庄の地頭職となったということである。その後、後醍醐天皇の建武中（一三三四～三五）城井冬綱豊前守護職となり、其子大和守親綱をして神楽嶽を守らしむ〔宇佐郡地頭伝記〕、後花園天皇の永享七年（一四三五）三月、新聞縫殿允広秀、菊池武忠に与して来て龍王城を攻む、城主安心院公重防戦す〔宇佐郡地頭伝記〕、文明五年（一四七三）春豊前国の士城井右衛門佳長野壱岐守、大友親繁に叛く、親繁の子政親之を攻め朽綱左馬助繁成、奈田伊賀守隆実等を先手の大

将となし、草葉阿波守・都甲兵部大輔、寵門片山佐田飛来を相添へ、中津郡糸口原に於て城井長野等と合戦す、城井戦死し、長野出奔す、政親兵を治して龍王城に入る〔太宰管内志所収軍記略〕、天文中（一五三二～五四）大内義隆大友氏に備ふる為に城井三郎兵衛尉を龍王城に派遣し守らせる〔宇佐郡地頭伝記〕、弘治二年（一五五六）豊前長岩城主野仲鎮信・松山の城代杉重・馬ケ嶽城主貫親清・岩屋城主秋月種実・神田城主神田重通・佐野城主佐野親重・宇佐郡の地頭三十六人の者共、年来大内大友の何れかに属していたが、この頃皆自立の志を抱き大友氏に叛く、依ってこの年の秋大友義鎮は大軍を率いて府内を発し宇佐郡龍王城に至りこの城を以って本陣となし、兵を分けて諸域を攻む、宇佐郡の三十六人衆先づ降参し、長岩城・松山城・馬ケ嶽城・三ケ岳城・神田城・佐野城相次で陥り何れも降参す、また彦山の衆徒も降る、ここにおいて義鎮田原親賢を以って宇佐郡妙名岳城に入り、龍王城を兼ねして又山内内記を以って龍王城番とする〔軍記略・豊府紀聞〕、弘治三年（一五五七）毛利の将吉川元春小早川隆景数万の兵を率いて豊前に入り門司城に拠る、松山城主杉十郎隆重・長岩城主野仲鎮守、紀伊長野等之に属す、大友義鎮兵数万を率いて来り龍王城に陣す、宇佐郡三十六人衆参陣す、田原親賢宇佐郡衆を率いて松山城に向い、佐伯惟教・志賀鎮安は長岩城に向い、戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理・斎藤鎮実等相共に門司城に向う、城中より野仲一族突出し伏兵を以って豊後衆を撃つ、佐伯惟教兵六千を以って長岩に押寄す、城守野仲鎮守降る、戸次鑑速以下一万五千の兵を以って毛利軍と立石原に戦う、吉川元春先づ臼杵鑑速の兵を破る、小早川隆景次に吉弘鑑理の兵を破る敗兵崩れて斎藤鎮実の備になだれこむ、鎮実大に怒り鑑速と共に力戦して進む、吉川・小早川の兵遂に敗れて規矩に退く、戸次・斎藤・臼杵・吉弘頻りに追討す、毛利の軍長州に退く、大友氏は田北大和守・朽網参河守をして馬岳城を攻めしむ、城主奴木親清出降る、長野吉辰・神田重清・伏野親重等皆降る、彦山の衆徒三千龍王に来り賀す、豊前全く平定す、大友氏即ち田原親賢と山内外記とを妙見岳城と龍王城とに留めて豊前を鎮せしめ府内に帰る〔歴代鎮西要略〕、要するにここでは弘治三年（一五五七）に大友義鎮が田原親賢を妙見城代とし山内外記を龍王城番としたということである。

天正十年（一五八二）安心院麟生（公正）大友氏に叛く、十月十二日妙見岳城探題田原親盛（親賢の養子）兵を発して来り

攻む、麟生の子千代松丸出て櫛野越に拠って防ぐ、新開玄蕃允統広後を襲う、千代松丸敗れて其臣八人と共に戦死す、麟生衆を率いて龍王城に籠る、翌年正月二十日城遂に陥る、麟生萱籠村中尾に至り敵兵に追われて自殺す。（宇佐郡地頭伝記）

天正十四年（一五八六）島津軍豊後に侵入するや、島津家久十二月五日大分郡鶴ケ城に押寄せて遂に之を陥れ、十二日戸次川に出で大友の軍を破り、十五日に至り又大軍を以って府内城を攻む、城中には兵が二万あったが敗れた。一方その頃大友義統は高崎城に居ったが戦局が不利であるのに気づき田原紹忍の居城龍王城に移った。（軍記略・歴代鎮西要略）

天正十五年（一五八七）七月黒田孝高、秀吉より豊前の京都・築城・中津・下毛・上毛・宇佐の六郡を賜わる。ただし妙見龍王の二城を除く（軍記略）。なお龍王城は秀吉の直轄であったようである。慶長五年（一六〇〇）冬細川忠興・忠利は豊前及び豊後の国東・速見三十九万一千石に封ぜられ、其龍王城も其治下となり、その臣飯河豊前城代となる。慶長八年（一六〇三）二月二十九日、忠興の弟幸隆一万石を受けてこの城に居り、同十二年（一六〇七）十一月卒す。慶長十七年（一六一二）閏十月忠興の臣長岡重政其父伊賀守好重に代り龍王城主として来る。（軍記略、龍王山妙庵寺記）

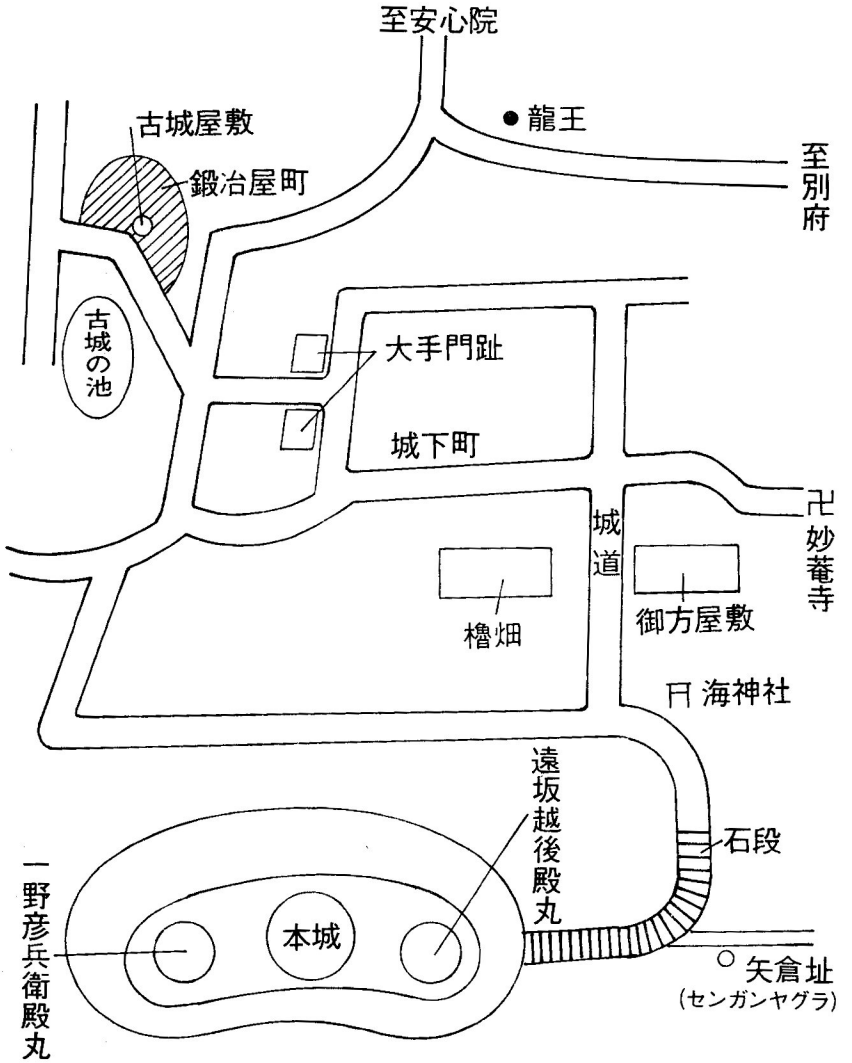
寛永九年（一六三二）十月、松平重直三万七千石を以って龍王城に封ぜらる、同十六年（一六三九）高田城に移り廃城となる。（豊城世譜）

正保二年（一六四五）正月十一日、高田城主松平英親（重直子・寛永二十年（一六四三）嗣ぐ）杵築に移封（豊城世譜）。これより二十五年間龍王城跡は幕府領となる。

寛文九年（一六六九）六月、松平忠房丹波福智山城より肥前島原に転封され、肥前・豊前・豊後にかけて七万石を領す、龍王城址はこれより島原松平の支配をうけ高田陣屋の配下になり明治維新に至った。（深溝紀略）

7　まとめ

龍王城については、由来史料のところである程度述べたので、ここではそのまとめとして龍王城の発生から滅亡までを簡単に述べることにする。



一口でいえばこの城は正安中創築より天正十年安心院氏亡ぶまでの安心院氏九代の居城であったということである。けれども戦国時代に至り大内毛利の南進と大友氏の北進によりこの城は妙見城とともに最も注目すべき要地となり、この頃の文書には必ずといっていいほど現われている。また大

内氏の抱城になるかと思えば一方では大友氏の抱城となったりしている。つまり安心院氏が大内方についたり大友方についたりしたためそうなったのである。同じようなことが妙見嶽城にもいえる。安心院氏滅亡後は細川氏がこの城にはいり、寛永九年に至り今度は松平重直が封ぜられたが、同十六年高田に移り以後廃城となった。つまり正安中に築かれてから寛永十六年廃城までの約三百四十年間存在した城である。なお現存する城跡はほとんどが江戸初期のものである。またこの城は安心院町の中心に位置する最も重要な城の一つであり、豊前豊後を結ぶ重要な役割をはたした城であった。

注　龍王城については大分県史跡名勝天然紀念物調査委員河野清実氏の調査報告を参考にした。その他『歴代鎮西要略』『太宰管内志』「軍記略」「龍王山妙菴寺記」『宇佐郡地頭伝記』郷土史家大江醇氏の話および、『安心院町誌』等を考参とした。

二　佐田城

1　名称

佐田城と称す。別名青山城とも称す。佐田城と称するのは佐田庄に城があったからである。また青山城と称するのは城が青山と称す山にあったからである。

2　位置

旧佐田村中央に聳え立つ俗称城山（海抜三百米）の山嶺に在る城である。北方は断崖急峻で山蔵川に迫り、南方一帯は急坂で、佐田郷を一望できる要害の地である。また龍王城と同様山城である。

3　現状

青山城には当時の空濠・残墨があり、野球ができる程度の地があるといわれている。なお平時はこの城に居らず、居館におり、戦時のみ城に居り、敵の侵入を防いだといわれている。その居館といわれるのが、あとで述べる赤井城である。青山城については写真をみればある程度わかると思うが、前で述べたように要害堅固であり、城に行く道さえないので、私はこの山に

登ることを断念した。現在城の登り口と思われる所に青山城と書いた石碑が立っている。山城であるので塁（土塁）、空濠ぐらいしか残っていないのが実状である。

4　由来史料

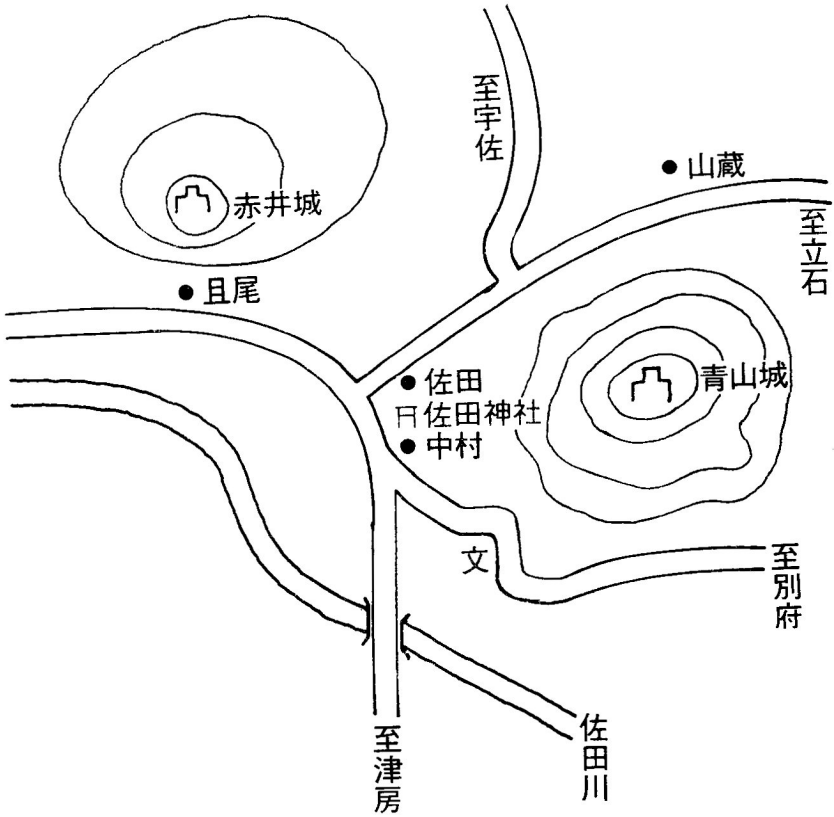
『豊前志』によれば「宇佐宮綱房築きて其子孫世々居りき」[注1]とある。中島魯直編、熊谷克己補修の『豊前古城誌上巻』にも殆ど同様の文字が見える。そしてこれらの記事は『築上郡志』巻二宇都宮史（佐田氏旧記、宇都宮系図）を引用したのではないかと思われる。というのは『宇都宮史』に「信房さらに宇佐郡田村に築きて因幡守綱房を置く、綱房佐田氏を称へ世々この城に居る」とあるからである。

しかし、この説はどうもまちがいである可能性が強い。というのは『宇都宮文書』所収の『佐田系図』に「八世親景応永六年（一三九九）始城二佐田荘青山一自二管迫一遷而居レ此因稱二佐田氏一」とあるからである。また四世通房が正応三年（一二九〇）十月四日に佐田荘地頭職に補任されたという文書があることからも綱房築城説が誤りであることがわかる。一方、『宇佐郡地頭伝記』の著者である尾立維孝氏や『大宇佐郡史論』の著者である小野精一氏も綱房説を一蹴し親景築城説を採用している。私もどうもこの説が正しいように思われる。そしてそれ以後（応永六年）この地に居り、十六世統綱まで佐田荘の地頭として活躍するのである。なお佐田氏の活躍等については『宇佐郡地頭伝記』『佐田文書』にも詳しく述べられている。

5　まとめ

佐田氏が正式にこの地にはいってくるのは前に述べたように応永六年であるが、佐田荘と関係をもつようになったのは正応三年以後である。つまり四世通房の時であり、それ以後十六世統綱までの二百九十八年間この地と関係をもつわけである。

青山城の成立年代は応永六年（一三九九）であるが、これはまずまちがいないと思われる。次にいつ廃城になったかであるが、それについてははっきりした史料がないのでわからない。ただ、『大宇佐郡史論』に「天正十五年（一五八七）には黒田氏に城邑は奪はれた」とあるので、その時か、その後にこの城は廃城となったと思われる。『安心院町誌』には「佐田青山城



は親景から鎮綱（一五世）に至る佐田氏八代百八十八年間の城地であった」といわれているが、私は親景から統綱（十六世）に至る九代百八十八年というほうがよいと思う。『宇都宮系図』に「統綱の時、城地失う」とあるのでそうしたほうがいいと言うのである。いずれにせよ、この城は古城跡中最も由緒明らかである。円照寺蔵『米神山八景絵図』に青山という山が出てくるが、その山がこの青山城である。

注1　宇都宮綱房

『宇都宮系図』によれば、綱房は宗房の子信房の七男で二世景房の弟である。彼が青山城を築いたといわれているが、これはどうも誤りのようである。なぜなら系図に載っている綱房の伝も明瞭でなく、その子孫が在城した形跡もわからないからである。

注2　青山城については『豊前志』『佐田郷土史』上巻　『宇都宮文書』、郷土

史家の話を参考にした。

三　飯田城

1　名　称

飯田城と称す。飯田城と称すのは、この城の城主の姓が飯田というからである。現在は飯田（ハンダ）というが、以前（この城が創建される以前）は飯田（イイダ）といっていたらしい。飯田氏（イイダ）の祖先が信濃飯田（イイダ）に住んでいたからそういうのである。

2　位　置

安心院町矢崎字城にある城である。標高百米ぐらいのところにあり、南は佐田川、西は安心院川に臨み、北と東は高山を負い、本丸は約三反歩、二の丸、三の丸、各二反歩余、安心院谷を俯瞰してはるかに龍王城と対峙する景勝の地である。

3　現　状

現在その地は桑畑、茶園畑になっているが付近に家老屋敷、与九郎、清加、蔵、新月屋敷等の名が残っているので当時この付近に屋敷があったにちがいないと思われる。実際、この地にくると要害堅固であり、敵に攻められてもなかなかおちないということがわかる。また、この地には飯田氏の墓もある。しかし歴代の墓が全部あるのではなく一部（一人）の者の墓だけがあるのである。その墓が飯田但馬守義忠の墓である。

4　由来史料

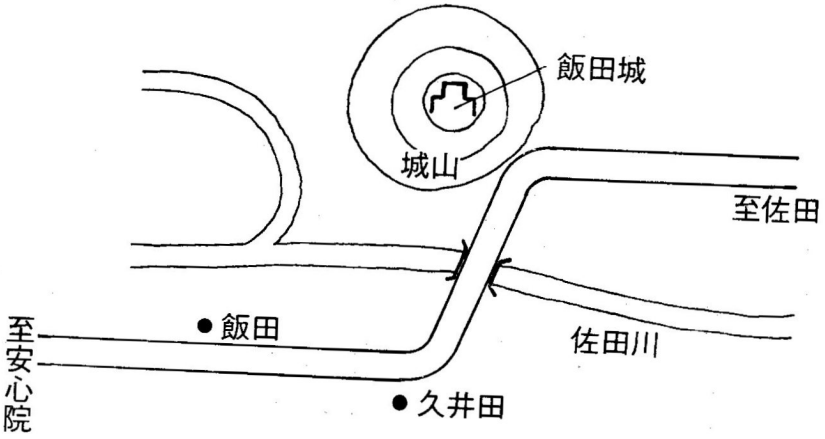
『宇佐郡地頭伝記』によれば「飯田氏、源義基孫土岐左衛門蔵人従五位下信濃守頼房始めて信濃国飯田に居る因て氏とす元暦元年宇治川に戦死す其子大和守重房建久三年豊前国に配せられ安心院永池村に居る因て永池村を改めて飯田村と名け字音にてはん田村と訓みおのか苗字も亦字音にて訓むこととせり逐に城を築きて飯田城と称す」とある。すなわち建久三年（一一九二）に築かれたということである。

その後昌秀（重房十二世孫）に至り、文安（一四四四～四八）・長禄（一四五七～五九）の頃豊前守護職大内教仁に服事しその子安芸守貞家、その子大炊助弘秀、その子孫五郎大炊助興秀と歴代大内氏に仕えて周防山口におり、その臣石川弥右衛門を飯田城代とした。〔地頭伝記〕石川氏宛の反銭状が残っているので、そのことはあきらかである。次に興秀についてであるが、これに関しては『宇都宮文書』頭註に次のようにある。「天文二十年九月朔日陶安房守隆満、杉勘解　判官隆相等の重臣を豊後に遣付せしめた。宗麟之を許し翌年二月十一日晴秀、橋爪美濃守鎮共吉弘鎮之等五百人を率ひ海路三田尻に着く三月三日山口に入った。将軍義輝の一字を賜ひ義長と改めた。廿二年正月従五位下左京大夫兼周防権介に叙任云々」

これでわかると思うが、この興秀という人物は陶氏の直属の部下であり、しかも大内と大友の掛け橋的役割をはたしている。またこのような関係をもつようになったのは天文三年（一五三四）の大牟礼山林鹿勢場ケ原の戦以来である。

その後弘治元年（一五五五）十一月十四日に至り、主君陶晴賢が厳島で毛利元就に滅ぼされるやいなやこの飯田氏は宇佐郡に帰り飯田城を守った。しかし宇佐郡に帰ったのは興秀の長子大炊助主計頭であり、興秀ではないらしい。おそらく晴賢と共に戦死したのではないかと思われる。もし飯田城に帰っていたなら墓があるにちがいないのにそれがないことからそう考えられる。また弘治二年（一五五六）四月に至り、三十六士がことごとく義鎮に降りたとあるが、その中の一人に飯田主計頭の名がみえることから、すでに興秀は死んでいたと考えられる。その後興秀の長子主計頭長秀は義鎮の偏諱を賜わって鎮敦と改めた。弟の但馬守義忠は終始飯田城を守り宗麟の門司城攻め、長野城井攻め、豊前各地の牢人退治等にも参加し功績をあげている。またこの項に書かれたと思われる文書に、義忠の名が見えることからもこの頃活躍したことがわかる。現在彼の墓が飯田城跡にあり、天正十五年という年号が見える。

一方、府蘭宗麟から但馬守の家老と思われる矢崎兵庫助宛消息が残っており、矢崎、飯田部落はその所領と思われる。まずこのことはまちがいないのであろう。ついでに矢崎という地名がでてきたのでその由来について若干述べることにする。なおこれは私の独断であるので真実性に乏しいがその点は了承願いたい。私は矢崎という名は矢崎兵庫助からきたのではないかと



思っている。現在矢崎に小字名として矢崎というところがあるが、そこに屋敷をかまえていたと考えるからである。

すなわち矢崎氏の屋敷跡を矢崎と呼び、それが現在の矢崎になったと考えるのである。

また義忠の墓碑に矢崎氏の名が見えることからも矢崎氏がこの村の有力者であったということがわかる。それ故有力者の氏をとり矢崎と称するのであると私は考える。ところで矢崎氏と興秀の頃の石川氏であるが、どちらも家老であったと思われるが、両者がどういう関係にあったのかという点がよくわからない。ある郷土史家の話を聞けば石川氏は帰農し庄屋をつとめたといっているが、もう一方の矢崎氏についてはなんらふれてないのでよくわからない。

一方、『宇佐郡地頭伝記』に「鎮敦の遺子新左衛門重堅荘村中荘花に帰農」とあるので義忠が最後の城主であったと考えられる。

5　まとめ

以上述べてきたことをまとめて述べると次のようになる。まずこの城が築かれたのは建久三年（一一九二）であり、大和守重房が初代城主である。その後十二世昌秀、十三世貞家、十四世弘秀、十五世興秀相継いで大内氏に仕え山口に居った。その間この飯田城は城代石川氏が守っていた。陶氏滅亡〔弘治元年（一五五五）〕後は十六世長秀（後に鎮敦）

が山口から帰りこの城を守った。しかし滅亡以前からこの城は長秀弟但馬守義忠が守っていたので、鎮敦は正式の城主ではない。天正十五年（一五八七）にひとり義忠が亡くなるので、その時点でこの城は滅亡したといってよい。飯田城の齢は三百八十年位かと推定される

四　潰山城

1　名称・位置

潰山城と称す。安心院町田ノ口潰山にあるので潰山城と称すのである。付近に城山下、馬場という小字名が残っているがこれは当時の名残りと思われる。また潰山に行ってみるとわかるが、この城跡は山の中にあり、いかにも山城の感じがする。なお現在は石切り場となっているので当時のおもかげはひとつもない。せめて石垣ぐらいあれば城の規模もわかるのに、残念である。

2　由来史料

『宇佐郡地頭伝記』「中山氏の項」に「衛藤親重の族中山に居る者を中山氏となす嘉吉中内膳正正房城を田之口村潰山に築き大内氏に属す」とある。すなわちこの城は嘉吉年中（一四四一～四三）に築かれたということである。また文安三年（一四四六）八月二日の「深見領分四方指」にも中山内膳正の名が見える。その後大永年中（一五二一～二七）に太郎左衛門尉重生と云う者が出て、勢場ケ原の戦（天文三年）に参加し功績をあげたが、天文十二年（一五四三）五月八日、出雲国湯浜で戦死した。その子が弾正忠で門司城攻め（弘治二年九月二十六日）に参加した。その後天正十三・四年（一五八五・八六）に至り鎮道と云う者があり、田原紹忍に属して活躍し、その子角左衛門に至り寛永九年（一六三二）恒松村庄屋となった。

3　まとめ

以上をまとめると次のようになる。この城は嘉吉年中に内膳正正房によって築かれて以来、角右衛門に至るまでの約二百年

間存在したといわれている。その間、正房・重生という人物が文書上に現われ活躍している。一方、この城は今まで述べた城（龍王城、青山城、飯田城）にくらべると規模が小さかったようである。というのは安心院氏、佐田氏、飯田氏などは宇佐郡の地頭の中でも勢力がわりに強かったほうであるが、この中山氏はそれほど目立つ地頭ではなかったからである。なおここで中山氏を地頭といったが、私はむしろ地頭というより土豪といったほうがよいと思う。あまりにも規模が小さすぎるからである。また、この城は居館というよりむしろ城塞というべきである。そして地形的分類からすれば山城に属する。

五　森山城

1　名称・位置

森山城と称す。安心院町森にあるので森山城と称すのである。大村城（深見河内守居館）のちょうど東側にあたる山にある。この山は標高百メートルぐらいである。現在は何も残っていないが、この地に伊賀屋敷と呼び、森村西という所に香浄寺と称する地があり仏堂が存在している。なお、伊賀屋敷と称するのは香浄寺氏が代々伊賀守であったからである。

2　由来史料

『宇佐郡地頭伝記』によれば「深見氏の族深見郷森村の山上に塁を築きて居り香浄寺と称す」とある。すなわちこの城の城主が香浄寺氏であるということであるが、いつ頃築かれたものであるかはわからない。しかし応安中（一三六八～七四）に伊賀守房直という者があり大内義弘に属し官軍菊池武朝と戦ったとあること〔地頭伝記〕から、すでにこの頃この城は築かれていたと考えられる。

その後弘治二年（一五五六）八月三日に至り、松木和泉守正直によって滅ぼされた。〔地頭伝記〕つまり、この年にこの城は、滅んだことになる。なお、その時の感状（紹忍が和泉守にあてたもの）が現存している。（深見亀策氏蔵文書）

3　まとめ

以上述べたことをまとめると次のようになる。この城の成立はいつかはっきりしないが、応安中（元年一三六八）よりも以前であると考えられる。滅亡については弘治二年（一五五六）であることははっきりしている。以上からして約二百年間は存在していたと考えられる。これはあくまで推測であるのではっきりした答えではない。一方、この城を地形的分類からみれば山城に属しているといえる。またこの城は、城というよりむしろ城塞というべきであろう。単なる柵を設けたくらいの城であったと思われる。

六　鳥越城

1　名称

鳥越城と称す。鳥越村にあったので鳥越城と称すのである。城というよりむしろ砦というべきである。

2　位置

安心院町鳥越にあり、旧小学校の校地全体の高台で龍王山の南麓、もっとも嶮要の地区にある。すぐ隣に光勝寺という寺があり、深見谷がすぐ下にみえる。

3　現状

付近には城柵の遺跡があり、原形を認めうる塹壕の痕迹がある。樓の跡もある。現在矢倉の辻というところがあり馬場、門口、切寄の地名あって昔時を物語っている。面積二町歩、ただし本丸のあとは校地全面で三四反歩位区割されている。城廓を構えるのに恰好な地で川を前に控え後ろに龍王山を控え深見渓をみおろすことができる。

4　由来史料

この城は深見河内守の居城跡とも、河内守盛時の居城趾ともいわれている。〔大宇佐郡史論〕

また、一説では河内守兼守の養子基直（建保中〔一二一三〜一八〕深見谷を分けて領す）の頃の城跡ともいわれている。し

かしこれは誤りのようである。

次に深見氏に関する史資料をあげておこう。

文安三年（一四四六）の『四方指』によれば「河内守盛行立石山分水嶺まで所領とす」とある。

永正中（一五〇四～二〇）深見壱岐守利という者あり大永元年（一五二一）十一月玖珠郡松木備中守敗政の子信濃守宗則を養ふて嗣となし壱岐守則孝と改称す。〔宇佐郡地頭伝記〕

天文元年（一五三二）基興（則孝子）大内義隆の為口斎藤駿河守等と妙見岳城を守り大友勢を退く。〔宇佐郡地頭伝記〕

弘治二年（一五五六）四月、基資（基興子）大友義鎮に降り其軍後に従ふ。〔宇佐郡地頭伝記〕

天正七年（一五七九）十一月三日紹忍の催促に応じ安心院、香志田、臼杵等と共に長岩城主野仲重兼を撃つ。〔宇佐郡地頭伝記〕

一昨三日田原近江入道被申談宇佐郡被相催野仲兵庫頭領内上津野村迄相働被得勝利候由預注進候、辛労察存候、殊安心院中務入道香志田出雲入道粉骨深重之趣諸勢無恙候由肝要候、紹忍以熟談銘々承以状可申候条閣筆　恐々謹言

十一月五日　　義統　花押

深見壱岐入道殿

臼杵美濃守　殿

以上が深見氏に関する史料である。鳥越城に関する史料ではないが、当時この跡に居ったといわれる深見氏に関するものである。

5　まとめ

鳥越城に関する文書がないのでなんともいえないが、この城跡は天文年中（一五三二～五四）のものと考えられる。すなわち壱岐守則孝、その子壱岐守基興時代の城跡ということである。また築城の規模からも、天文天正頃のものであると思われ

る。そうすると建保文安の河内守時代のものではないかということになる。

また「切寄」という地名があることから、「支城」ではないかともいわれている。〔小野龍膽氏説〕私もこの説に賛成である。というのは、大村に大村城と呼ばれる館があり、その城主が深見氏であるからである。つまり大村城が本城で鳥越城が支城であるということである。一方『安心院町誌』によれば「鳥越城の頃で大永三年（一五二三）河内守盛時大友義鑑の攻撃をうけ滅亡」とあるが、これは鳥越城ではなく大村城のまちがいである。

現在大村の剣星寺に深見河内守の廟所があることから大村城が河内守の城であることがわかる。それ故もう一方の鳥越城が壱岐守の城であったと思われる。

七　筌口城

1　名称・位置

筌口城と称す。安心院町筌ノ口にあったので筌ノ口城と称すのである。松本から筌ノ口にぬけるところに城があったといわれているが、はっきりしたことはわからない。現在小字名として城ノ越という名が残っているのでそこが城跡だと私は思う。なお茶臼山にあったといわれている城は筌ノ口城ではなくて安倍氏の居城であると思われる。

2　由来史料

『大宇佐郡史論』によれば「筌ノ口城趾、明治村筌ノ口にあり、文安中（一四四四～四八）筌ノ口に日向守漬久の居りし城にて、今も茶臼山に城趾存じ局屋敷射場の本などの地名あり」とある。

『豊前国古城記』によれば「西光寺村田代筌ノ口日向守」とある。それ故この城の城主は筌ノ口氏であると思われる。また、筌ノ口日向守清久は「深見領分四方指証文」にも連署している。『宇佐郡地頭伝記』によれば「其後孫幸之丞重範天文三年四月六日速見郡山香郡大牟礼山の後に従ひ帰村の後入道して居邸の後の山腹に菴を立て霊泉寺と名け阿弥陀如来を安置す」

とある。

その後重範の子善左衛門則一にいたり、帰農して後庄屋となり子孫連綿たり、と『地頭伝記』にある。すなわち筌ノ口城は重範の頃まで存在したことになる。

ところで、筌ノ口氏がこの地に土着するようになったのはいつごろからかといえば筌ノ口甚左衛門範定以後である。〔それまでは時枝（宇佐市時枝）に居た〕『地頭伝記』に、「永享七年（一四三五）三月新開縫殿允龍王城を攻むるに当り範定防戦功あり深見郷の一谷を賜ふ因て其氏を地名に負はせて筌之口村と曰ふ」とあることからそういう結論に達したのである。

3　まとめ

以上述べたことをまとめると次のようになる。すなわちこの城は永享七年（一四三五）以後に範定によって築かれ、重範に至るまでの約二百年間存在したことになる。いつごろ廃城になったか、その年代についてははっきりしないが、則一が庄屋になる以前の、一六〇〇年前後であると思われる。筌ノ口城がどこにあったのか、その辺がはっきりしないのが残念である。いずれにせよ、松本から筌ノ口にかけて空壕があるといわれているので、それが城跡の一部であると考えられる。

八　赤井城

1　名称

赤井城と称す。太尾山城とも称す。また一名菩提寺城とも称す。赤井城とはどういう意味なのか、どういう理由でそういうのかについては、はっきりわからないが、その付近が太尾山ということから太尾山城と称するのである。現在その地に小字名として屋敷ノ上、太尾、古城、菩提寺、城という名が残っている。

2　位置

安心院町大字且尾字太尾にあり、即ち駅館川の上流、佐田川の右岸にあり、且尾村のちょうど真裏にあたるところに位置し

ている。標高百二十〜百四十米のところである。また赤井城は字城と称するところにあり、まわりには空堀（水がなく継面がV形である堀を言う）をめぐらしている。

太尾山は且尾裏山より突き出た山で、背後には大蔵連峰があり、甚だ険峻である。それゆえ、ここに佐田氏が城を築いたのである。

3　現　状

現在その地に城濠、廃墨、池、佐田氏の墓〔貞和中（一三四五〜四九）のもの、天正中（一五七三〜一五九一）のもの〕、菩提寺跡、桜の馬場（七反歩許りの一区割）等が残っている。一方、今日、円照寺に山門があるが、これは赤井城大手門を遷したものであるといわれている。しかしはっきりしたことはわからない。

4　由来史料

この城が佐田氏代々の居館であることは明らかであるが、いつ頃築城されたかその年代については史料がまったくないのでわからない。

しかし、泰景の軍忠状〔永正二年（一五〇五）七月〕に菩提寺の名が出てくることから明応中（一四九二〜一五〇〇）に赤井城が存在していたことは明らかである。

一、去明応七年十月二日豊後勢至佐田庄　令乱入之間執構菩提寺弾正忠泰景一所楯籠之処一同五日敬寄陣於追上則当所菩提寺相懸之条、砕手討捕頸二進上之、敵毎日雖手仕従二日至八日支置、大勢侍中御合力畢。　（佐田文書）

また、この文書から泰景父子が大友氏（親治）の侵入を菩提寺城で防いだことがわかる。

そしてその後何度も大友氏はこの菩提寺城を攻めたが、要害堅固であるので攻め落とすことができず退散したという。天文三年（一五三四）二月二十三日付の文書にそのことが記載されている。その文書とは左の如きものである。

去廿日到朝景宅所、敵取懸候処終日防戦、殊被得勝利、討捕頸十四送進上之通、以杉因幡入道吹挙之状遂披露候、為敵

猛勢之処、以小勢被得勝利之条、粉骨無比類被思召候段、昨日（廿二）二宮御参籠候、此砌目出度注進御大慶候、必重而可被成御感候、先得其心能々可申之旨候恐々謹言

二月廿三日　　武助判
　　興国判
　　興重判

佐田因幡守殿

なお武助とあるのは杉勘左衛門尉越中守平武助であり、朝景とあるのは十三世因幡守朝景である。一方、朝景は敵（大友勢）を討ったことによりその恩賞として、築城郡の地を与えられた。なおその時の文書が現存しているので、ここに掲げることにする。

花押（義隆）

下

可合早領知豊前国築城郡広幡光重拾五石地福屋左衛門太夫先知行事

右件地事去月廿日至朝景宅所、豊後勢取懸之時、遂合戦討捕頸拾四到来、殊度々馳走、云袷云恰為忠賞所充行也者。早守先例可全領知之状如件。

天文三年三月九日

また、弘治二年（一五五六）卯月十三日の文書によれば、「大内義長老臣小原安芸守の斡旋により反銭免除され居城菩提寺を修築する。境目に地下一揆猥起したるにより取鎮めのため雑掌を以って言上云々。」とある。このことから佐田弾正忠隆居がこの地に居り、城を修築したことがわかる。

以上が佐田文書（宇都宮文書）の中の菩提寺城（赤井城）に関するものである。

5　まとめ

この城がいつ頃できたか、それについては文書に記載されてないのではっきりしたことはわからないが、貞和年中（一三四五～四九）のものがあることから、この頃すでに佐田氏がこの地に居ったのではないかと考えられる。

しかし『宇都宮文書』によれば、宇都宮氏が佐田庄に実際にはいってきたのは八世親景の時（応永六年（一三九九）城井谷管迫から遷居）佐田氏居ったと考えるのは誤りではないかとも考えられる。そうすればこの墓（貞和中の墓）は佐田氏のものではないということになる。ではだれの墓なのかということになる。そこで私はその墓は宇都宮氏の代官であった人のものであったと考える。そう考えれば話の辻褄が合うからである。

以上から私は赤井城に居ったのは宇都宮氏の代官（正応から応永まで）で、応永六年（一三九九）以後、宇都宮氏（佐田氏）がこの地に移ったと考える。なおこれはあくまで私の推測であるので、はっきりしたことはわからない。いずれにせよ、応永六年以後この城に居り、十六世次郎統綱までここを居館としたことは事実である。

またこの城は他の城にくらべ、水の便もよく日常生活にも不便でなかったので、大友軍の攻撃に耐えることができたのである。

第三節　地頭と屋敷・館

安心院町内には前で述べた城跡のほかに屋敷跡・館跡と思われるものが七つほどある。

その七つとは次の如きものである。(1)田口城(2)津房村城(3)丸山城(4)安心院氏館(5)新開氏館(6)大村城(7)松木氏館。しかし、田口城・丸山城についてはその所在がわからなかったので、現地にいって見学するということができなかった。また小字名を調べても城に関する名がでてこなかった。それ故ここでは『宇佐郡地頭伝記』『大宇佐郡史論』『宇佐山郷先達伝』等を参考に

して述べる以外手がなかったのでいくらか誤りがあるかもしれない。

またこのほか簡単な土塁などもあったらしい。いずれにせよこのころの城は平城とちがって防禦設備もきわめて貧弱であり柵程度の砦であったと思われる。

一方ここで述べる安心院氏館・新開氏館、大村城、松木氏館などは今まで述べた山城とは違い平城である。すなわちこれが館（居館）と呼ばれるものである。その規模についてははっきりしたことがわからないが『地頭伝記』である程度わかる（たとえば二反一畝という具合に面積をしるしたもの）。次に当時の地頭の生活についてであるが、これに関してはまったく史料がないのでわからないが、『一遍上人絵伝』（京都歓喜光寺蔵）に筑前国の地頭の館をえがいたものがあるのでそれである程度わかる。しかしそれは13世紀末の作であるので、宇佐郡の地頭にはあてはまらない。

また宇佐郡の地頭は規模も小さいし、優雅な生活をする財力もないので筑前国の地頭の生活がそのまゝ宇佐郡地頭とはいいきれない。だが周囲に土塁を築き掘をめぐらしていたことはほぼ同じであると思われる。

地方史研究協議会編『地方史研究必携』に滋賀県甲賀郡柏木村山中氏屋敷絵図を復原した図が載っているが、宇佐郡の屋敷もほぼ同じであると考えられる。

『安心院記』に安心院氏館の図が載っているが、その図もこれによく似ている。

以下七つの館について位置・城主（館であるから城主というのはおかしいがとりあえず城主と呼ぶことにする）、成立年代あるいは滅亡年代等について述べることにする。

一　田口城

『大宇佐郡史論』に「田口城趾、弘治の頃（一五五五～五七）田口雅楽允といふがをつて、大友氏に禄していた」という程度で、はっきりしたことはわからない。

二　津房村城

『大宇佐郡史論』によれば「津房村城、天文中（一五三二～五四）津房次郎丸というものが居て、津布佐を津房と改め、弘治二年（一五五六）大友氏に降った天正十七年（一五八九）黒田氏に城地を没せられた」とある。

しかし、その所在については詳しく述べられていない。ただ「尾立」という地名があるだけである。

次にこの城の成立年代であるが、元応中（一三一九～二一）の文書に津布佐弥五郎入道の名がみえることからすでにこの頃この地に居ったと考えられる。なお津布佐氏の名が出てくるのはこれが最初である。また、玖珠城の戦い（延元年（一三三六）にも足利方として参加し、活躍した。（着到状や軍忠状に彼の名がみえる）

その後裔がここでいう次郎丸である。そしてこの頃津布佐を津房と改めた。つまり、これ以後津房という名が使われるようになったということである。

ところでこの津布佐であるが、この名が始めて文書に現われるのは文治年間（一一八五～八九）である。すなわち『石清水文書』の「弥勒寺喜多院所領注文」に「津布佐庄八十町」とあるのが最初である。

また津布佐が弥勒寺領の荘園であることも右の文書からわかる。それ故地頭が置かれていたということも考えられる。そこで次にこの荘園に居たと考えられる地頭ははたしてだれなのかということが問題になる。そう考えている時、この文書（元応元年）がでてきたので津布佐氏がこの荘園の地頭であったことがわかった。

以上から津房村城は津布佐氏入部以後成立し、天正十七年（一五八九）まで続いたことが明確となった。しかし補任状がないのでいつこの地にはいってきたのかはっきりしたことはわからない。いずれにせよ元応元年以前であることはまちがいないと思われる。というのはこの荘園がすでに文治年間に成立していたからである。なお津布佐荘に関しては、『九州荘園史料叢書』八巻に詳しく述べられているので、それを参考にしてもらいたい。

それ以前は今述べたように津布佐を使っていた。

三　丸山城

『佐田系図』六世公景の伝に「応永元年（一三九四）二月宇佐郡居合之侍大蔵伊予介広谷左京、久井田左近、飯田修理進（以下十二人）永く主君と仰可申旨依願宇佐郡佐田縣築丸山城居住一家政道順直」とある。これによって丸山城の存在がわかる。が実際存在したかどうかはわからない。というのは他に参考にすべき文献がないからである。一方、大隈米陽氏（郷土史家）は青山城の別名ではないかといっているが、はっきりしたことはわからない。

四　安心院氏館

この館は地頭安心院氏の居館である。平時はこの館で生活し戦争が始まると龍王城（神楽嶽城）に籠り、敵と戦った。

安心院氏がこの地にはいってきたのは、公泰の頃で、この頃龍王城（当時は神楽嶽城と呼ぶ）が築かれ、安心院荘が成立した。その孫の公宣に至り宇佐大宮司兼地頭職となり、上市村に居った〔宇佐郡地頭伝記〕。つまりこの上市村に館があったということである。いま大字上に「御屋敷」という小字名が残っているが、それがどうやら館跡であるらしい。約四反ばかりの地である。また折敷田の一部にもヤグラ跡、馬場跡が残っているが、これも安心院氏歴代の館跡と推定される。重松義胤の『安心院記』に古図が書かれているのでその規模がある程度わかる。相当宏壮な館であったと思われる。そしてその後九世千代松丸まで（天正十一年六月まで）この館は存在していたと考えられる。というのは天正十一年（一五八三）六月二十八日付府蘭宗麟より佐田弾正忠宛の書状に「安心院千世松退散」という語が見えるからである。

現在上市に安心院に安心院千代松丸の墓があり、そして折敷田田圃中には千代松丸夫人の墓もある。またこの館（屋敷）は安心院三屋敷の一つに数えられるといわれている〔小野精一氏〕。

五　新開氏館

『宇佐郡地頭伝記』によれば「新開氏の祖先は北条時政の次男時房で、曽孫広長が新開庄地頭として九州に下向し、木の裳村滝立下に館を構えた」とある。それが現在の字西光寺というところである。

その子広忠の時、妻垣八幡宮司兼地頭職となり、その子玄蕃助胤氏の時〔康元二年（一二五七）〕妻垣社司および座主をして造宇佐宮役を勤めた〔妻垣文書〕。その後孫に新五兵衛という者があるが、これが天正十年（一五八二）安心院千代松丸を九八ケ峠で襲ったのである

その玄孫に知広という者があり、その時〔元禄十一年（一六九七）〕妻垣神社宮司を罷め、下市村三女神社職となり新原村に移った。

以上を総合すると、この館は建久七年（一一九六）三月（広長大友能直に従い下向）に創建され、元禄十一年（一六九七）まで存在したことになる。

六　大村城

深見郷大村にある城である。城というよりむしろ居館（屋敷）という方がよいかもしれない。現在大村に内城・外城の地名があるがこれは当時の名残りと思われる。またその地に深見河内守の廟所の碑がある。

『宇佐郡地頭伝記』によれば「兼守と伝ふ者深見郷大村に居る因て氏とす子なし水車村深見基愛弟基直（大神姓）を養ふて嗣となす正和中（一三一二〜一七）右近王郎広政と云ふ者あり」とある。つまり、大村城には深見氏（和姓）が居ったということである。

応安中（一三六八〜一三七五）に河内守政直という者があり大内義弘に属して南軍菊池武朝と戦い利なく、その孫河内守盛

行に至り、「深見領分四方指」を定めた。その孫盛時に至って、大永三年（一五二三）大友義鑑のために攻められ、一族はみな自殺した。

すなわち、大村城は大永三年（一五二三）に滅んだことになる。

七　松木氏館（木村城）

1　名称・位置

畳石城と称す、また木村城とも称す。安心院町畳石にあるので畳石城と称すのである。一方、木村城とはどういう意味なのかはっきりしたことはわからないが、『大宇佐郡史論』の著者が木村城と呼んでいるので木村城と呼ぶことにする。なお現在城跡は松木氏の末裔の屋敷となっており、付近には松木氏一族の菩提寺である石重山西福寺があり、境内には大永年間（一五二一～二八）の地蔵塔・宝篋印塔その他の古塔が累々と残っている。実際現地に行けばわかるが、左側には川があり右側には山があり、敵の侵入を防ぐことのできる地にこの村がある。ところで、この建物を、「城」と呼ぶこと自体問題があるように思われる。というのはこの建物が江戸時代大庄屋として栄え、松木氏館と呼ばれていたからである。それ故ここではあえて畳石城とは呼ばず松木氏館としたのである。

2　由来史料

松木氏の出自については別稿にゆずり、ここでは松木氏の畳石土着以後について述べることにする。

松木氏が畳石村に土着するようになったのは天文元年（一五三二）以後である。それまではこの地に大内氏麾下糸永隼人が居ったがこの松木氏（和泉守）によって滅ぼされた。

このことについては深見亀策氏所蔵の文書に次の如きものがある。

豊前国宇佐郡内畳石四拾町分、知行所可宛行之状、如件

天文元年三月廿九日

義　鑑　　花押

松木和泉守殿

また「松木氏系図」からもそのことはわかる。そして現地調査した結果、宗氏の位牌が現存している。その子五郎右衛門則氏（後に和泉守正直と称す）に至り、弘治二年（一五五六）四月大友氏に降り、それ以後大友氏の武将として活躍し、同年八月には森村の香浄寺伊賀守を滅ぼした。

その子三右衛門尉宗則（後に正春と称す）に至り、天正十五年（一五八七）二月三好秀次に従い薩州に入り、十七年（一五八九）三月黒田長政に降りその地をさしだした。その後彼は太田重正（臼杵城主）を攻めたが攻めきれず、ついに紹忍とともに自害した。また大庄屋となったのも彼の時である。

その子与治右衛門正重に至り、寛永十四年（一六三七）小笠原長次に属し島原の乱に参加した。

以上が畳石村土着後の松木氏の略歴である。なおここでは大部分『宇佐郡地頭伝記』、「松木氏系図」を参考にした。ところで「松木氏系図」は正重まで同じ紙で書かれているが、それ以後は別の紙（紙が新しい）に書かれている。つまり正重までの系譜は寛永中（一六二四〜一六四三）に書かれたものであり、それ以後はずっと後に書かれたものであると推定される。

3　まとめ

この城の成立年代についてははっきりしたことはわからないが、糸永年人がこの地に居ったといわれているので、この頃成立したのではないかと思われる。その後天文元年に松木宗氏という者が玖珠郡から畳石村に移ったとあるので、この松木氏の居城であったことはほぼまちがいないであろう。

以後は松木氏の居館となり。江戸時代に大庄屋として存続していくわけである。これは今まで述べた城とはちがい、近世まで続いた特殊な館であることは注目すべきことである。

むすび

本稿は、私が安心院地方を中心にして14世紀初〜16世紀末までの城について調査したものである。なおここでいう城は江戸時代のものとちがって規模も小さくて、単なる柵を設けた程度のものである。それ故、城とは言い兼ねるが、城柵や、砦も城の一種であるので、ここでは城と呼ぶことにした。

また、安心院地方にあったと思われる城のほとんどが山城で、しかも要害堅固の地にあったので一般に城塞と呼んだ。中世城郭について調べるとそのほとんどがこのような城であり、標高一五〇メートルから四〇〇メートル前後の独立峰、または連山の一峰を籠城用に加工し、そこを居城としたことがわかる。そしてこのような城は鉄砲伝来以前の弓矢時代に防備のために構築されたこともわかる。

また、城跡について調べてみると、城があったと推定される地には必ずといっていいほど「城」「古城」「馬場」等の名がみえる。それ故、城の所在地を調べるにはまず最初に小字名を調べる必要があるということがわかった。

中世の城郭のほとんどが、山城であったので、近世まで存続しえなかったことも、本稿でわかる。龍王城などはその典型的な例である。すなわち、この城は安心院氏滅亡後細川氏、続いて松平氏が入城するが、いずれも山城であるので不便であるといってこの地を退去した。

一方、城について調べるため、山に行くと今まで気がつかなかったことも注意してみれば、城の一部であることがよくわかる。たとえば石垣などがそうである。山にいけば石をつんであるところがいくらでもある。それを城の一部ではないだろうかというふうにしてみていくことによってはじめて城の所在がわかる。だから城を調査する場合、実際に現地に行ってみることはもちろん、古老の話や郷土史家の話も注意深く聞く必要がある。

ところで、安心院町の城であるが、これらの城はほとんどが豊臣委吉の天下統一の頃滅んでいる。小は大に併合されるとい

うのが、この頃の通例であるのでそうなったのである。地頭が滅亡すれば城も破壊され草むらに埋もれてしまうのである。それ故城について調べるにはまず地頭についてしらべるべきである。そうすれば城の推移がよくわかる。

以上が城を調査するにあたって感じたこと、わかったことである。これをまとめると次のようになる。

まず、第一に、城があったと思われるところには必ずといっていいほど城、古城、屋敷土居、馬場等の名がついている。

第二に、これらの城のほとんどが天正期を境に滅亡しているということである。つまり弱小孤立がこの頃には不可能になったということである。

第三に、この頃活躍した地頭（三十六士）の家は一部を除いてほとんど滅亡した。すなわち、黒田氏に抵抗したり、城邑を没収されたりしたためである。

第四に、町内にあったと思われる城のほとんどが山城であるということ。つまりこの頃が戦国時代であったがために、そういう型の城が多かったのである。

（宇佐郡安心院町飯田三五二）

お知らせ

本誌の表紙上部右端に記した **ISSN** 0287-6809の番号は「国際標準逐次刊行物番号」です。これは逐次刊行物に付号される国際的なコード番号で、以後この番号によって図書館などで本誌の識別や検索が行なえるようになりました。